

CASPワークショップ参加記

江尻 美砂

1999年12月5日に国際医療福祉大学・国際医療福祉総合研究所で開催された「CASPワークショップ」に参加しました。「CASPワークショップ」とは Critical Appraisal Skills Programme ワークショップ、つまり医学論文を批判的に吟味できる能力を身に付けるためのワークショップであり、それは今話題のEBM（根拠に基づいた医療）を実践していくためには欠かせないものといえます。

今回の参加人数は30人で、我々が日頃大変お世話になっている大学図書館の方々がズラリとお顔を揃えてみえました。大学図書館以外では出版社、製薬会社などから参加されており、病院図書室からの参加は私を含めて2名でした。そういった意味でも心細く、私はただ緊張と不安ばかりでしたが、皆様とても暖かく迎えて下さり、約3時間半と短い時間でしたが、このような機会がなければなかなかお会いできない方々にいろいろお助けいただきながら、多くの事を学べたように思います。

開会のごあいさつ、プログラム紹介等が30分程あり、その後グループディスカッションが始まりました。参加者を10人程の3つのグループに分け、その中でディスカッションしながら論文を批判的に吟味してゆくのです。

論文は10の質問に従って読んでいきました。質問内容は、論文中の統計には偏りがなくランダム化比較試験が行われているか、参考文献がきちんとあげられているかといったものなど

で、どれだけその質問に「Yes」で答えられるかによってその論文で述べられている結果の信用性を計っていきます。

今回が第1回目であったことやディスカッションが白熱したことなどが理由となり、与えられた約1時間半では質問と照らし合わせながら論文を最後まで読みこなしていくことはできませんでした。論文を読みこなすには、統計学の知識も必要であり、なによりもこのワークショップのような経験を重ね、論文を読み慣れていくことが大切だと分かりました。溢れんばかりの情報の中から利用者が求めるものを早く正確に選び出し、さらにそれが信頼性のあるものかどうか見極められるようになるにはまだまだ勉強が必要だと改めて感じました。

何事においても日々目覚しくコンピュータ化が進んでいる中、皆様の図書室でもそれらを取り入れ時間と労力の短縮を図ってみえることと思われます。しかし、今回のこの“論文を読みこなしてゆく”ということに関してはコンピュータに頼るわけにはいかず、我々人間が行わなくてはならないのは明らかです。私はこの研究会でCASPやEBMについて学ぶと共に、人間でしか出来ないサービスの大切さをも学んだような気がします。コンピューター化の流れに流されてしまって、それを忘れてしまう事のないよう今後も図書業務に取り組んでいきたいと思ひます。